

Udagawa, T., 1966: Variation of aerodynamical characteristics of a barley field with growth,

J. Agr. M. Japan, 22, 7-14.

====海外だより====

E. T. ピアス博士逝く

畠山久尚*

Dr. Edward Thomas Pierce は1978年2月22日に交通事故のためサンフランシスコで死去された。

ピアス博士は1916年5月にウェールズの海岸に近い Llandudno で生れた。彼はウェールズ大学で1937年に BSC の学位を得た後、1940~45年の間は British Supply Ministry に勤めたが、第2次世界大戦後にケンブリッジ大学で本式の教育を受け、1951年には気象物理学で Ph D の学位を得た。1950~57年の間はキャベンディッシュ研究所に勤め、ここでの業績の顕著なものは雷放電カウンターで、それは今日もなお使われている型式のものである。

その後1年間は Vickers Group Research Establishment に勤めたが、そのあとはアメリカ合衆国に移住した。アメリカでは1959~60年は Avco Mfg. に、ついで1960~75年は Stanford Research Institute に勤めた。1975年1月から4月にかけて、駐日アメリカ大使館付科学官として東京に滞在し、またその間に日本国内各地を視察した。1976年には S.R.I. を離れてオクラホマ州 Norman にある Severe Storm Laboratory に移ったが、1978年には再び S.R.I. International (前の S.R.I.) に顧問として戻った。

ピアス博士は、IUGG の国際大気電気学委員会の名誉委員長に選ばれ、また IUGG と URSI の二つのユニオンに関係した電波気象連合委員会の委員をしていた時期もある。また日本地球電気磁気学会の会員でもあった。

我々は、彼が電光放電やその他大気電気一般および電波雑音の専門家だと思っているのだが、そのほか、天体物理、気体放電現象、核爆発、波の伝搬等に関する業績も多いのだと言う。また彼は一見つまらない問題としか

思えないことから、直に重大性のある意味をつかみとる才能を持ち合わせていた。たとえば洋式の浴室や、滝の電気、スーパータンカーの爆発が、水滴分裂による帯電現象で一貫して説明し得ることを示したりもした。

またパーティなどで集まって話している時には、彼のまわりには笑い声が絶えなかったことで見ると、ユーモアとか冗談とかが巧みであったのだと思う。

彼は何回も来日しているので、日本の大気電気関係の研究者で会っている人たちも多い。1968年に第4回国際大気電気学会が東京で催された時にも夫人とともに来日しているが、その時は7回目の来日だと言っていた。その後1975年に大使館付科学官として来日した時には、東京付近在住の大気電気関係の研究者たちで講演を開き、そのあと会食もした。その時の会談で、筆者は彼の執筆した浴室の電気の現象 (Weather, Dec. 1966 所載) に大いに興味を持ったので、大気電気の講義や講演の緒言にはいつもそれを使うことにしているのだということをお話したところ、その後神戸へ行って、ある造船所での講演の折に、その緒言で筆者がそのようにしていると言うことを付け加えて話して、その講演原稿を送ってくれたりした。

1974年1月にホノルルで開かれた A.M.S. の年次大会で行なった彼の総合講演が、Bulletin A.M.S. の同年10月号に掲載されたが、これは大気電気の色々の面を示していて面白いので、測候時報の1975年第12号で紹介しておいたから、関心のある読者はそれを参照されたい。

ピアス博士は、彼の妻ヒロコ(日系)をカリフォルニア州ワトソンビルに遺し、一人のいとこをウェールズに遺した。62歳という、今で言えばまだ若い年齢の彼を失ったことは、大気電気の学問のためにもまことに残念である。

* Hisanao Hatakeyama